【土木計画学研究・講演集 No.13 1990年11月】

リゾート行動に関する意識調査分析

Analysis of Consciousness on Individual Resort Behabiour

春名 攻**, 金城昌幸***, 山田孝弘****

By Mamoru HARUNA, Masayuki KANESHIRO, Takahiro YAMADA

In recent years, many projects of a resort development for promotion of regional economic and social activities has been planned and implemented. One of the keys to have been obtain desirable success of resort development is to grasp the resort needs in the society of each district in Japan.

So, the survey having effective questionnaire on individual resort behaviour which were carried out to clalify the subconscious resort needs for planning.

This paper describes the result of our analysis based on this questionnaire and some considerations, and finally the authors related propose useful informations for planning a resort development project in the Keihanshin-urban-district.

1. はじめに

近年わが国では、国民の生活価値観の多様化等を背景に、全国各地で地域振興をめざしたリゾート開発計画が実行に移されようとしている。しかし、これらのリゾート開発計画は画一的な内容のものが多く、「多様化」,「成熟化」した現代では不成功に終わる可能性が強い。そこで、リゾート開発を成功に導くためには、新規に需要を創造することや潜在的需要を顕在的需要へと開発していくことが必要である。そして、「需要創造」,「需要開発」の具体的な戦略を策定する際のToolの1つとして、潜在的リゾートニーズの把握が重要であると考える。

本研究では、以上のような認識に基づき、リゾート行動に関するアンケート調査結果から潜在的リゾートニーズの分析を行った。さらに、この分析結果に数量化理論第II類を適用して要因分析を行い、リゾートに対する関心度とリゾート地選定行動に影響を与える要因を抽出することとした。

2. リゾート行動に関する意識分析

本研究では、各個人行動の積み重ねが需要を構成していることから、前提条件として人間の行動仮説を設定し、この仮説に沿って研究を推進していくことにより、研究としての方向性を明確にすることができると考えた。図－1に人間の行動を概念的に図

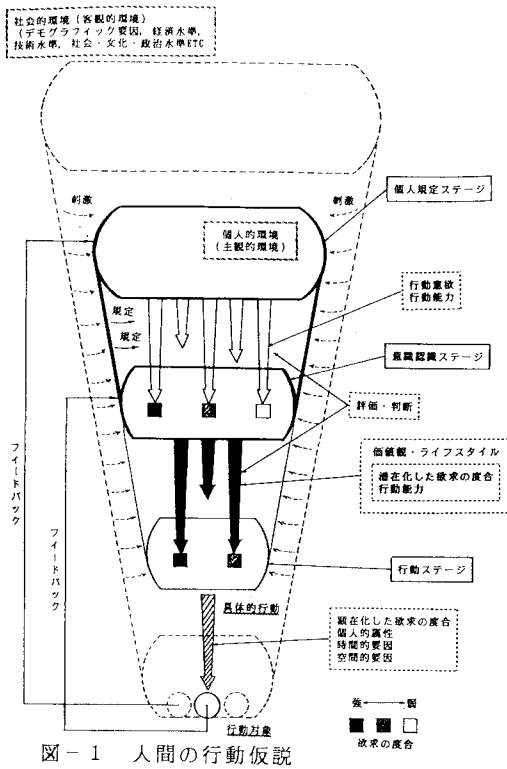
* キーワード：リゾート，意識調査，リゾート行動

** 正 員 工博 立命館大学理工学部 教授
(〒603 京都市北区等持院北町56-1)

*** 正 員 立命館大学研修員
(第一技研コンサルタント㈱)
(〒603 京都市北区等持院北町56-1)

**** 学生員 立命館大学大学院理工学研究科
(〒603 京都市北区等持院北町56-1)

式化したものを示す。さらに、図－１の仮説に従って、リゾート客の行動仮説を具体的に設定したものを図－２に示す。この仮説に基づいて、アンケート調査の質問項目を設計し、各行動段階の潜在的ニーズの分析を行った。



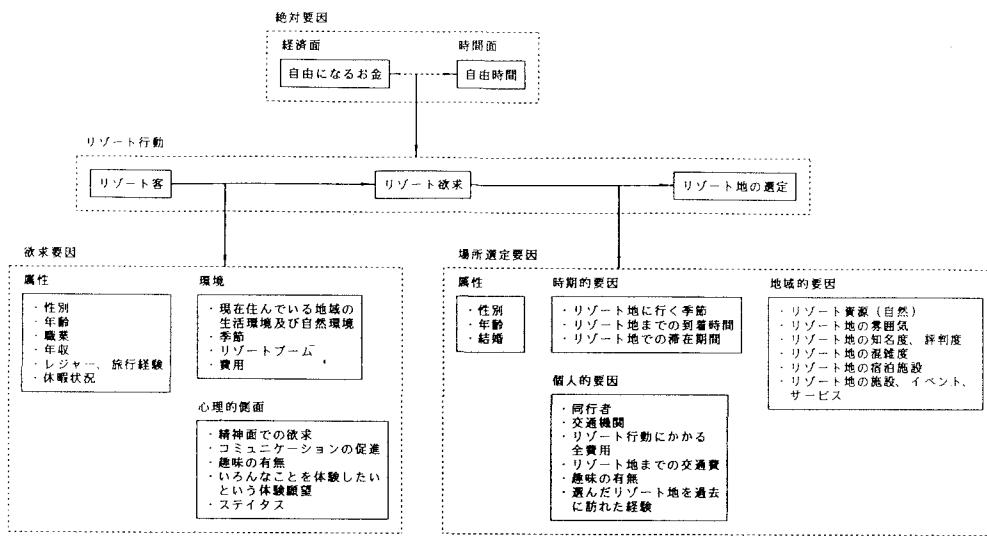
図－１　人間の行動仮説

（１）行動仮説の概略的説明

①人間の行動仮説（図－１）

人間は、様々な要因で構成されている社会的環境（客観的環境）の中に存在しており、社会的環境の刺激を受けると、過去の経験や感受能力等によって自分なりにこれを処理し、自らの独立環境エリアとして個人的環境（主観的環境）を作り上げる。そして、人間の行動プロセス全般は、個人的環境によって規定される。

本研究では、人間の行動は、個人規定ステージ，意識・認識ステージ，行動ステージの３ステージによって構成されていると仮定した。まず個人規定ステージは、個人の内的構造を形成する要因であるパーソナリティや知的水準、外的構造を形成する要因である経済水準等により構成されている。そして、これらに影響されて、各種の行動対象に対する自身の意欲や能力が規定されるとした。そして、これらの行動意欲や行動能力に基づいて、行動対象に対する潜在的欲求が生まれるとした。つまり、個人規定ステージから意識・認識ステージまでの空間に相当する個人的環境空間において、行動対象に対する欲求が生まれると考えた。次に意識・認識ステージでは、前段階で生じた潜在的欲求を具体的行動に結び付ける際に、自らの評価・判断に基づいて行動対象に対する自らの認知・動機づけを行う。すなわち、



図－２　リゾート客のリゾート行動仮説

ここでは自らの価値観やライフスタイルの構築を行うとした。そして、価値観やライフスタイルに従い、潜在化した欲求の度合や行動能力に影響され、潜在的欲求が顕在的欲求へとステップアップするとした。最後に行動ステージでは、顕在化した欲求の度合や、行動を起こす際の個人的属性，時間的，空間的要因に影響され、自らの評価・判断に基づいて行動対象を選定し、具体的行動を起こすとした。

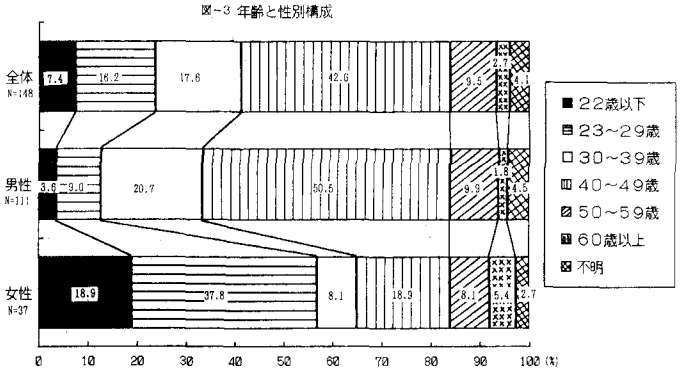
さらに、人間はある行動を１度経験することにより、それに対して潜在的な意識を持つようになる。そのために、再び既経験行動を行う場合には、潜在的欲求レベルからの行動となる。また、未経験行動の場合には、START からの出発となる。つまり、既経験行動の場合には意識ステージへ、未経験行動の場合には個人構造ステージへとフィードバックし、これを順次繰り返すループ行動となるとした。

②リゾート客のリゾート行動仮説（図－２）

ここでは、前述した人間の行動仮説に従って、次のようにリゾート客のリゾート行動を仮説した。

まず、各種の欲求が集合した形で潜在的なリゾート欲求が生まれるとした。そして、これらの潜在的なリゾート欲求の中から、自らの評価・判断によりいくつかの欲求を選定し、それが顕在化することにより、具体的なリゾート地の選定へと移行していく、という２段階プロセスを仮定した。そして、リゾート行動を起こす際の絶対必要条件を「絶対要因」、潜在的リゾート欲求に影響を与えると考えられる要因を「欲求要因」、さらに、リゾート地の選定の際に影響を与えると考えられる要因を「場所選定要因」と名づけた。

図－3 年齢と性別構成



（２）アンケート調査

調査項目は、前述の行動仮説に沿って設計した。その内容は、個人属性、リゾートに対する関心度、さらに実際のリゾート行動について交通手段や費用、そしてリゾート地を選定する際に考慮した事柄等々から構成した。これらの調査を、平成２年１月に近畿圏を対象にして実施し、その結果、有効サンプル数１４８（回収率78.7 %）を得た。

（３）調査結果

①個人属性

回答者の特徴としては、年齢では４０代の割合が多く（42.6 %）、性別では男性の割合が多かった（75.0 %）（図－３）。また職業では、サンプルのほとんどが社会人であった（85.8 %）。

そこで、社会人の所得状況では、「５００～１，０００万円」の中所得者層が37.8 %であった。次に、社会人の休暇状況であるが、通常休暇については、「完全・隔週週休２日制」が75.0 %と大半を占めていた。そして、連続休暇については、年平均の取得回数（５日以上）は、「０～１回」36.5 %、「２～３回」50.6 %で、その際の休暇日数は、「４～７日間」が46.0 %であった。さらに、今後の希望連続休暇日数と希望回数は、「７～１０日間」31.8 %、「２回」43.2 %であった。このことから、現状では小規模な休暇は増加傾向にあるが、諸外国並の大型休暇の実現には到っていない状況にあることや、今後も２週間以上の連続休暇の実現は、可能性が薄いと考えている層が多数を占めていることが推測できた。

また、レジャー・旅行回数（年平均）では、「年に１～２回」が40.5 %であった。このことから、現段階では依然として余暇生活が日常生活の一部として位置づけられていないことが推測できた。つまり、余暇行動は、日常的行動ではなく特別的行動として位置づけられていると考えられる。しかし、今後の生活で力点を置く項目については、「レジャー・旅行・余暇生活」の占める割合が多く、これより、今後の余暇行動やリゾート行動に移行する可能性のある潜在的欲求が存在することが推測できた。

②リゾート行動

> リゾートとは、非日常的な空間で、その中に長時間身を置くことによって、精神的欲求を充足させることが可能になる空間である。

リゾートイメージについては、年代別にほとんど差はなく、この調査結果に基づいたリゾートの定義づけは、上記に示した通りである。そして、リゾートに対する関心度は、「関心がある」55.4 %と高いが、「どちらでもない」という中間層の割合の多かった（33.1 %）。この中間層は、リゾートに対する潜在的欲求が生ずる可能性も秘めており、今後は、これを喚起させる具体的な戦略を策定する必要があると考える。

また、リゾートイメージにおいて、「日帰り」は 3.4 %と非常に低かったが、この点に関しては、調査結果に若干の疑問が残った。つまり、本調査における日帰り型リゾートに関する調査データは、有効性に欠けているのではないかと考え、ここでは今後の課題とし、追加調査・分析を行うこととしている。そして、滞在型リゾートでは、季節は「夏頃」34.5 %となり、リゾート＝夏のイメージが強いことが推測できた。そして、同行者では、「家族」が48.6 %であった。これは、回答者のほとんどが既婚者であることが影響していると考えられる。つまり、既婚者のリゾート行動は、家族単位の行動になることが推測できた。次に、交通機関では、「自家用車」が37.2 %であった。これは、リゾート地での周遊面等のフレキシビィリティを考慮した上での選択であると考えられる。さらに、リゾート地までの到着時間では、

表－1　影響要因とカテゴリー

影響要因	カテゴリー						
	1	2	3	4	5	6	7
①年　齢	22歳以下	23～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上	
②年　収	300万円以下	300～500万円	500～1,000万円	1,000～1,500万円	1,500万円以上		
③現在住んでいる地域	大阪府	兵庫県	京都府	奈良県	和歌山県	滋賀県	
④レジャー・旅行回数	ほとんどしない	年に1回程度	年に1～2回	年に3～4回	年に5回以上		
⑤週休2日制	週休1日制	週休1日半制	完全週休2日制	隔週週休2日制	月1回週休2日制		
⑥連続休暇回数（5回以上）	0 回	1 回	2 回	3 回	4回以上		
⑦連続休暇日数	3日間以下	4～5日間	6～7日間	8～9日間	10～11日間	12～13日間	14日間以上

表－2　影響要因とカテゴリー

影響要因	カテゴリー							
	1	2	3	4	5	6	7	8
①年　齢	22歳以下	23～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上		
②リゾート関心度	普通	少し関心がある	非常に関心がある					
③リゾートタイプ	マリーナ型	海水浴型	スキー型	内陸型スポーツ型	保養・滞在型	温泉型	歴史・伝統型	複合型
④リゾート地に行く季節	春頃	夏頃	秋頃	冬頃	特定しない			
⑤リゾート地での滞在期間	2～3泊	3～4泊	4～5泊	5泊以上				
⑥同行者	家族	夫婦	恋人	自分だけ	友人・知人			
⑦交通期間	鉄道	貸切りバス	自家用車	レンタカー	バイク	航空機		
⑧リゾート地までの到着時間	1.5～2.0時間	2.0～2.5時間	2.5～3.0時間	3.0時間以上				
⑨リゾート行動にかかる全費用	1.0～1.5万円	1.5～2.0万円	2.0～3.0万円	3.0～5.0万円	5.0～10万円	10万円以上		
⑩リゾート地の宿泊施設	ホテル	旅館	民宿	ペンション	別荘	リゾートホテル	リゾートマンション	会員制ホテル

「３時間以上」が54.7 %であった。このことから、リゾートに対して「遠いところに行く」というイメージが存在しており、回答者は、遠いところに行くことにより非日常的な空間が得られると考えていることが推測できた。また、滞在期間では「２～３泊」33.1 %、宿泊施設では「リゾートホテル」17.6 %、リゾート行動にかかる全費用（１人当たり）では、「５～１０万円」29.1 %であった。このことから、現状のリゾート行動は、短期集中型が中心であり、昨今のリゾートブームにも少なからず影響されていることが推測できた。そして、リゾート行動が短期集中型であるにもかかわらず高い費用を想定していることにより、リゾート行動に対して割高感を抱いていることや、リゾートイメージと現実の行動がマッチしていないことも推測できた。さらに、今後関心のあるリゾートタイプでは、若年層では「内陸型スポーツ型」、高年層では、「保養・滞在型」，「温泉型」であった。

３．リゾート関心度，リゾート地選定行動に関する分析

（１）分析の概要

ここでは、アンケート調査で得られたデータのうち、リゾート関心度と滞在型リゾート行動において選定したリゾート地の２点と、個人特性・意識の関連を数量化理論第Ⅱ類を用いて分析を行った。

（２）影響要因とカテゴリー

リゾート関心度とリゾート地選定行動に関する高次分析を行うに当たって、その外的基準には、前者はリゾート関心度、後者はリゾート地をとった。また、影響要因としては、クロス集計等の１次分析結果より抽出した。その際、影響要因は、アンケート調査の質問項目と選択肢に準じて設定した。（表－１，表－２）

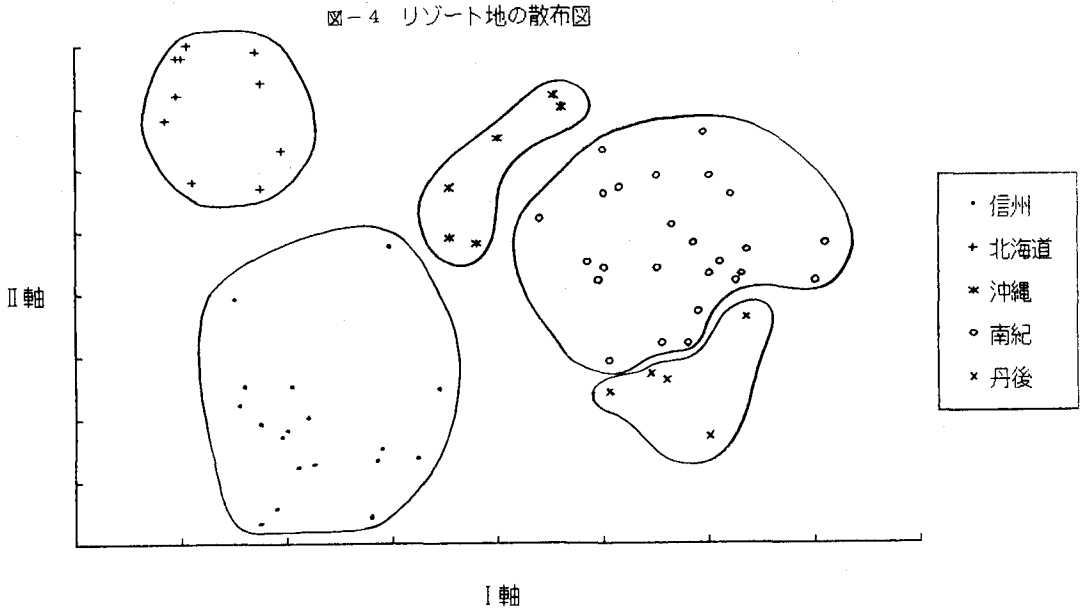
（３）分析結果

①リゾート関心度に関する分析

分析結果を表－３に示す。相関比は 0.35855と決して高い値ではなかった。

分析の結果、リゾート関心度に最も影響力の強い要因は、表－３のレンジの大きさから判断すると年齢であり、続いて現在住んでいる地域、連続休暇回数（５日以上）の順となっている。年齢が大きく寄与することは、各年代別に、リゾートに対する意識やその浸透度に差が生じていることが考えられる。さらに、現在住んでいる地域の値が大きいことは、近郊に滞在可能な適地が存在するかどうかにより、リゾートに対する関心度が影響を受けることが考えられる。また、連続休暇日数の値が小さいことは意外であった。これは、大型の連続休暇が望めないことや、現状のリゾート行動が短期集中型であること

図－４　リゾート地の散布図



表－3　リゾート関心度の数量化Ⅱ類による分析結果

アイテム	カテゴリー	カテゴリー数量	レンジ（順位）	偏相関係数（順位）
年　齢	２２歳 以 下	-1.48362	4.04166 (1)	0.37636 (2)
	２３～２９歳	-0.24371		
	３０～３９歳	0.31260		
	４０～４９歳	-0.04709		
	５０～５９歳	0.77409		
	６０歳 以 上	-3.26757		
年　収	300 万円以下	0.89138	1.74596 (4)	0.24989 (5)
	300～ 500 万円	0.25274		
	500～1,000 万円	-0.14735		
	1,000～1,500 万円	-0.18339		
	1,500 万円以上	-0.85458		
現在住んでいる地域	大 阪 府	0.13504	2.39491 (2)	0.31353 (3)
	兵 庫 県	0.28006		
	京 都 府	-0.82701		
	奈 良 県	0.82968		
	和歌山県	0.38634		
	滋 賀 県	1.56791		
レジャー，旅行回数	ほとんどしない	-0.59283	0.78497 (7)	0.14597 (7)
	年に１回程度	0.19213		
	年に１～２回	-0.00808		
	年に３～４回	0.09426		
	年に５回以上	0.00385		
週休２日制	週休１日制	-0.25165	1.47135 (6)	0.42701 (1)
	週休１日半制	-0.39261		
	完全週休２日制	0.97269		
	隔週週休２日制	-0.49866		
	月１回週休２日制	0.51336		
連続休暇回数（５日以上）	０回	-1.10398	1.88379 (3)	0.31003 (4)
	１回	0.51325		
	２回	-0.03696		
	３回	-0.11150		
	４回以上	0.77981		
連続休暇日数	３日間以下	-0.41851	1.53473 (5)	0.22895 (6)
	４～　５日間	0.45158		
	６～　７日間	-0.10381		
	８～　９日間	0.05725		
	１０～１１日間	-0.39525		
	１２～１３日間	-1.01796		
	１４日間以上	0.51677		
外的基準（サンプル数）	関心がない　(7)	-0.37891		相関比　0.35855
	どちらでもない(39)	-0.76843		
	関心がある　(66)	0.49426		

注）外的基準もしくは各アイテムに関して、１つでも不明解答のあるサンプルは除外している。

表－4　リゾート地選定行動の数量化II類による分析結果

アイテム	カテゴリー	カテゴリー数量	レンジ（順位）	偏相関係数（順位）
年　齢	２２歳 以 下	0.14012	2.99213 (1)	0.79512 (3)
	２３～２９歳	-0.07139		
	３０～３９歳	-0.49881		
	４０～４９歳	0.18771		
	５０～５９歳	0.55715		
	６０歳 以 上	-2.43498		
リゾート関心度	普　通	-0.33710	0.61614 (9)	0.65569 (7)
	少し関心がある	0.27903		
	非常に関心がある	-0.16376		
リゾートタイプ	マリーナ型	1.66951	2.24948 (2)	0.90651 (1)
	海水浴型	1.24337		
	スキー型	-0.51356		
	内陸型スポーツ型	-0.22693		
	保養・滞在型	-0.57997		
	温 泉 型	0.29721		
	歴史・伝統型	0.20730		
	複 合 型	-0.38698		
リゾート地に行く季節	春　頃	0.53732	0.80443 (8)	0.55174 (9)
	夏　頃	0.02605		
	秋　頃	-0.05188		
	冬　頃	0.25665		
	特定しない	-0.26712		
リゾート地での滞在期間	２～３泊	0.29698	1.02981 (6)	0.69831 (6)
	３～４泊	0.00901		
	４～５泊	-0.73284		
	５泊以上	-0.37423		
同 行 者	家　族	-0.07641	0.92236 (7)	0.55785 (8)
	夫　婦	0.61863		
	恋　人	-0.30373		
	自分だけ	-0.13171		
	友人・知人	-0.02548		
交通機関	鉄　道	0.13219	1.42423 (5)	0.77768 (4)
	貸切りバス	-0.50431		
	自家用車	0.22281		
	レンタカー	-0.05417		
	バ イ ク	-0.19027		
	航 空 機	-1.20142		
リゾート地までの到着時間	1.5～2.0 時間	-0.19337	0.57773(10)	0.52636(10)
	2.0～2.5 時間	0.15127		
	2.5～3.0 時間	0.38436		
	3.0 時間以上	-0.11661		
リゾート行動にかかる全費用	10,000～ 15,000円	1.47142	2.05859 (3)	0.85467 (2)
	15,000～ 20,000円	0.48968		
	20,000～ 30,000円	0.29506		
	30,000～ 50,000円	-0.58717		
	50,000～100,000円	-0.26626		
	100,000円以上	0.97438		
リゾート地の宿泊施設	ホ テ ル	0.16132	2.05450 (4)	0.74057 (5)
	旅　館	0.35610		
	民　宿	-0.38328		
	ペンション	0.04921		
	別　荘	0.95741		
	リゾートホテル	-0.24508		
	リゾートマンション	-1.09709		
	会員制ホテル	0.68930		
外的基準（サンプル数）	信　州 (19)	-0.82578		相関比 0.91592
	北 海 道 (11)	-1.33349		
	沖　縄 (6)	0.07863		
	南　紀 (26)	0.96463		
	丹　後 (5)	0.96125		

注）外的基準もしくは各アイテムに関して、１つでも不明解答のあるサンプルは除外している。

から、単発の長期連続休暇よりも５日程度の連続休暇を年に数回取得することの方が、リゾート行動に対する選択の幅を拡大させるとの解釈も成り立つであろう。しかし、本分析では、レンジと偏相関係数の序列が異なる等、さらに詳細な検討を要する箇所も見受けられる。

②リゾート地選定行動に関する分析

分析結果を表－４に示す。相関比は 0.91592と非常に高い値となった。

分析の結果、リゾート地選定の際に最も影響力の強い要因は、表－４のレンジの大きさから判断すると年齢であり、続いてリゾートタイプ、リゾート行動にかかる全費用の順となっている。この結果より、実際の行動は、年齢に大きく影響されていることが考えられる。つまり、各年代別に嗜好するリゾートタイプが異なる傾向が少なからずあるために、そのリゾートタイプにより必然的にリゾート地が決定されていくことが考えられる。このことは、リゾートタイプが第２位に挙げられていることの裏付けでもある。そして、リゾート行動にかかる全費用の値が大きいことは、費用により到達可能範囲が限定されるためであると考えられる。また、本分析を行う際に抽出した影響要因群は、リゾート地を選定する際の直接的な要因ばかりであるために、相関比が高い値となったと考えられる。以上より、実際のリゾート行動メカニズムの構造は年代別に異なって、まず、いくつかの候補地が決まり、それから直接的な要因に影響されて１つのリゾート地を決定する２段階の構造になっていることが推測できた。

さらに、本分析により得られた結果を、第Ｉ軸と第II軸の平面に示したものが図－４である。これより、南紀と丹後は、ほぼ同じイメージであり、また沖縄グループに近いことから夏というイメージが強いことが推測できた。そして、信州，北海道，沖縄は、それぞれ違うイメージであることが推測できた。

４．おわりに

本研究では、近年、地域振興策の有効な一手段として全国各地で期待が高まりつつあるリゾート開発を捉え、これを成功に導くためには、潜在的リゾートニーズを十分把握した上で開発計画を策定することが重要であると考えた。そこで、アンケート調査結果に基づいて各種の分析を行ったが、これらにより、リゾート行動に関する潜在的リゾートニーズの把握と、リゾート関心度，リゾート地選定行動の影響要因を抽出することができ、リゾート開発計画策定の際の有効な支援情報が得られたと考える。

以下に、その主要な成果をまとめる。

①将来的に、リゾート需要は増大傾向にある。

②現在では、リゾート行動に対する欲求の多くは潜在的なものであり、これが顕在化する状況に至っていない。この原因として最も影響力の強い要因は時間面と経済面であり、時間面においては、社会人の休暇状況にみられるように現状に満足している人が少なく、経済面においては、リゾート行動にかかる費用が高いと考えている人が多数を占めている。

③実際の行動では、若年層は友人グループ単位の行動になり、既婚者層は家族単位の行動になる傾向がある。

④リゾート関心度，リゾート地選定行動に最も影響を与える要因は年齢である。そして、リゾート地選定行動は、個人の心理的側面等の間接的な要因に影響されていくつかの候補地が決まり、それから、直接的な要因に影響されて１つのリゾート地を決定する２段階の構造になっている。

今後は、本研究の成果を踏まえ、さらに詳細な調査・分析を行うことにより、リゾート行動メカニズムを解明していく予定である。

《参　考　文　献》

１）嶋口充輝；戦略的マーケティングの論理，誠文堂新光社，１９８４

２）吉田正昭他；消費者行動の理論，丸善，１９６９

３）林知己夫；数量化の方法，東洋経済，１９７４．１２